
太陽が見える街

新城寺ハヤト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽が見える街

【NZコード】

N8015A

【作者名】

新城寺ハヤト

【あらすじ】

舞台は今よりはるか未来の26世紀の日本。第五次世界大戦の影響で汚染物質と太陽の紫外線におびえた人々は地下で暮らすことを余儀なくされてしまう。科学者たちはなんとかして再び人類を太陽の下で暮らせるように試行錯誤する中、ひとつ情報入手する。「日本に一つだけ太陽の下で暮らしている街がある」この情報の真偽を確かめるためにとある科学者が一人娘を連れて旅立つ

プロローグ

プロローグ

時代は現在から数百年後の地球……

地球の温暖化はもはや温暖化とは呼べなくなるほど深刻なものとなつており、太陽の紫外線は全ての生物を焦がす光線となつて地上を滅ぼしていった。

科学者の藤宮正史ふじのみやまさしはこの状況を打破するために街全体を紫外線から守るシェルターを開発した。これにより、紫外線が人々の不安の種となることはなくなつたが、彼らは暗く湿つたシェルターの中で人工的なライトの明かりのみを頼りに生きていくことを余儀なくされた。十六年後、人々の不安と不満が絶頂期に達し、溢れだそうとしていた時、一件のニュースが正史の元に入ってきた。

「博士、今日の朝刊はご覧になりましたか」

「まだだが、何かあつたのか？」

人々の不満を解消させようと日夜策を練つていた正史の目は夜通し起きていたため赤かつた。

「博士、また街の人々のことを考えていたのですね。人のためにがんばるのもいいですが、あなたはもっと御自分大事になさつてください」

科学者の言葉みな文句に正史は適当に頷き話の続きを促した。「今日的一面なんですが」科学者はそう言って新聞を広げる。

「これは……シェルターをはずして十年も無事でいられた街があるだと！どこだ、その街は」

「コンピュータデータベースにアクセスした結果、ここから一百キロ先にある元首都の街だというデータが出ました」

「首都跡か……」

正史は下を向いて考えた。首都跡といえば今もまだ第五次世界大戦の影響で汚染されている場所だ。下手をすれば紫外線以前に、汚

染物質にやられてしまつ可能性がある。科学者もそのことをわかっているのか、じつと正史の出す答えを待つている。

「私が現地に行って直接調べよう。」

正史は再び上を向いてそう言った。

「シヨルターなしで生きられる技術があるなら私はそれを活用したい」

「しかし、お嬢様はどうなされるのです？まさかお一人にされるつもりでは」

「まさか。彼女も連れて行くさ。今の状況から言ってあまり気乗りはしないが、私はあの子にまだ、太陽というものを見せたことがないからな。出発は三日後にする。それまでにこっちも万全の調査に臨むための準備をするぞ！」

そして正史は一人娘のあきを連れて、首都跡地行きのトランスポーターに乗った。

える街

太陽が見

STAGE 1

STAGE 1→ 出会い

「 ヴーン…

機械音と共にトランスポーターに人の形が浮き上がりしていく。

「ここは……」

ショルターと同じような暗い場所にでたせいか、正史は一瞬この情報はガセネタだと思った。

扉が開き、この街の市長とも呼べるような初老の男が入ってきた。「ようこそ、我が街へ。私がこの市長を務めておりますラムル・ハワードです。以後、お見知りおきをお願いします。藤宮正史博士」

「いらっしゃい。早速なのですが、この街がショルターなしで十年も生活しているというのは本当ですか？」

「ええ、我々はもう十年間そうしておりますよ。どうぞ、いらっしゃってもらえばわかります」

ラムルは笑つて頷くと、二人を部屋の外に案内した。そこはかなり前の時代のオフィス風な感じになつており、あきの興味を引いた。

「これは…」

正史は窓にかかつているブラインドから漏れる光に驚いた。いくら英知を掛けて作った人口のライトでもこの光だけは真似できない。「このブラインドを開ければ太陽はもうすぐです。その前にこれを一粒飲んでください」

ラムルは一人に固形物質の瓶詰めを渡した。

「これがそちらで言うショルターの代わりとなるものです」「なるほど…」

探るように小瓶とラムルとを凝視した。正史は瓶のふたを開き、固形物質を一つ手に取った。

「毒ではないようだな」

「当然ですよ。まあ、飲まれたよりのでブラインドを開きました

よ」

特に気分を害した様子もなくラムルはブラインドに手をかけようと/or>する。

「待つて！」

ここにきてからあきが初めて言葉を交わした。

「どうしました、お嬢さん？」

「あ、あの、私、太陽見るのは初めてなので……」

壊れそうな声であきはそう言った。

「なるほど、それならゆっくりとブラインドを開けましょう。ここですか、こきますよ」

そつ言ひでラムルはブラインドに手を伸ばす。

「あ、まつ……」

あきが言い終わるのを待たずニラムルはゆっくりとブラインドを開いた。

「うわ！」

あきは反射的に目をつぶった。入ってきた光の量はさほどでもなかつたのだが、太陽の光を初めて目にすることにとってはそれでも眩しいくらいだった。

「なんてこつた……」

正史はあまりの出来事に目を丸くし、口もこれでもかというくらい空いている。田の前では建物の通りを歩く人々の姿が見えた。

「どうです？ 噂でも何でもありません。もちろん、スクリーンによる映像でもない。すべて真実です」

ラムルは特にどこかを強調するわけでもなく淡々と言ひた。

「お嬢さん、ゆっくりと、目を開けて御覧なさい」

ラムルはあきに優しくつぶやき、彼女の顔を覆つている両手をゆっくりはがした。

「…」

あきは窓の外の光景を田にじて、父と同じように固まつた。

「やれやれ、親娘で同じ反応ではおもしろくないですな」

ラムルはわざとおどけた調子で言つた。実際は一人の反応を見られて満足といった顔である。

「ここの薬をこれから一週間は毎日朝に一粒。それ以後は四日に一粒飲んでください」

「ラムルさん、少しお話を聞きたいのですがいいでしょうか」

「ええ、もちろん。では、向こうの応接室に行きましょう」

「お父さん……」

あきは不安そうに正史の顔を見上げた。

「お父さんたちはしばらく仕事の話に入るからあきは初めての外を散歩してみたら良いんじゃないかな? シェルターのライトとは違う自然のライトをゆっくりと楽しんでおいで」

「う、うん……」

あきはばつ悪そうに頷いた。

「ここから数十メートル離れた公園に行つてみるのもどうでしょうか? なにより近いですからお父さんとのお話が終わればすぐに向かえにいけます」

「わかりました」

あきは素直に頷くと正史に「いってきます」と告げた。

「ああ、気をつけて行つておいで」

あきは正史に「大丈夫」と付け加え、浮き足で外に出て行つた。

持ちながら街の中を歩いた。

(あのおじさんが言つこな、ここから数十メートルのところにあるのよね。まあ、公園だから田立つし、すぐにたどり着けるよ)

建物の外に出たあきは初めてお使いに行く子供のよつと緊張感を持ちながら街の中を歩いた。

(なんだか日本じゃないみたい。明るくて温かくて、それに風がすく気持ちいい。シェルターの中にこらのとはぜんぜん違う)

あきはショルターの中のあの独特的の湿氣を思い出した。昔の日本はそのくらい湿氣が多かつたらしい。

チチチ……

あきの視線が正面の歩道からさえずる小鳥へと移った。

「わあ」

あきは思わず声を漏らした。その視線の先にはきれいに整備された道を歩く老人や犬の散歩をさせている男性や、数え切れない人々がその縁あふれる公園で一時の安らぎを感じていた。あきはそのなかにおすおすと入つていいく。ここにいるすべての人の雰囲気を壊さないようだ。しかし、ほとんどの者はあきの存在に気づくことなく安らかな一時を感じ続けていた。

（みんな本当に気持ちよさそうだな。あそこベンチに座っているおじいさんとおばあさんなんてあまりの気持ちよさに眠っちゃってる）

あきはその光景を微笑ましげに見送りながら広い公園内をゆっくりと歩く。さっきまでは眩しかった太陽も目が慣れてきたのか、もう眩しくなかった。

（ぽかぽかしていて気持ちいい。ショルターの中じゃ、けして味わえない雰囲気だわ）

あきは立ち入り禁止の看板がかかっているにもかかわらず、小さな柵を乗り越え、芝生の中に入った。

（大きな樹。まるで映画や漫画に出てくる運命の大樹みたい）

あきは何を思いついたのか突然木の幹にもたれかかった。
(こいつやついたら運命の人人が走つてきたりなんかして……なんてね)

あきはロマンチックにしばらく木にもたれていたが、やがて立つていてるのが辛くなつたのか、その場に腰を下ろした。

「気持ちいい風……なんだか眠くなつてしまつた」

あきはゆっくり目を閉じながらまどろみの中に落ちていった。

「おこ、ここは立ち入り禁止だぞ！」

「ひやー！」

誰かの叱責を受け、あきはまだのみの中から田を見ます。ゆつくつと田をこすり何度も一度その人物を確認する。どう見ても知り合いでない。

「やば、起きちゃった？あ～ごめん、とにかく柵から出できてよ」眼鏡をかけた少年はおどけた調子でそう言つた。あきはまだ状況が理解できないまま少年の言つとおり柵を出た。

「いやあ、悪かったね」

さつきの厳しい叱責とは裏腹に少年の口調は優しかつた。

「ちょっとむしゃくしゃして、公園を歩いてたら立ち入り禁止の札の奥に君がいたものだからつこ文句の一つでも叫んでみたくなつて…」

「はあ」

まるでわけがわからない。あきがそつ思つている横で少年はべらべらと愚痴を言い始めた。

「こんなご時世だから受験ひとつ受けのむすびく大変でさ、毎日ほかの学生とトランスポーターの争奪戦で……って初対面の人になんて愚痴なんか言つているんだろ？」

「えつと、私に言われても…」

「そりゃそうだ」

真剣な顔の少年に言われて、あきが眞面目に首を捻ると少年はどうけて笑つた。そして、ひとしきり笑つた後、少年は眼鏡を直しながら言つた。

「変なことにつけ合わせて悪かったね。むしゃくしゃも晴れたし、僕はもう行くよ」

少年は最後にもう一度ぱつ悪わるい「ごめんなね」とつぶやくと、その場を逃げるようになつていった。
(なんだつたんだろう？今の)

あきは頭にはてなを浮かべながらその場を去つた。

オフィスに帰ると、ちょうど正史とラムルが外に出てきた。

「おや、あきちゃん」

ラムルが先に気づいたらしく、あきに声をかけた。

「約束どおり迎えにいこうとしていたところだよ」

正史は「機嫌のようだった。おおよそラムルとの話がうまくいったのだわ。」

「では、私はここで失礼します。新しい住居の鍵はここでの管理人から受け取ってください」

「わかりました。ラムルさん、また近いうちに伺いますよ」

「はい、楽しみしております」

ラムルはにつこりと笑うと、建物の中へと消えていった。

「お父さん、私たちの新居ってどこなの？」

「ここから少し歩いたところにあるマンションだ」

「それだったらたぶん公園の近くだね。公園の周りはマンションがいっぱい立ち並んでいたから」

「ラムルさんからもらつた地図を見てみると、そのようだね。もしかしたらあきに気を遣つてくれたのかもしれないぞ」

「そうだとうれしいな。あの公園にいるだけですぐ落ち着くの」

「そうか。後でお父さんを案内してくれよ」

「うん、いいよ」

親娘はそんな他愛のない会話をしながら自分たちの新居に向かつて足を進めた。

あきの予想通り、親娘の新居は公園から五十メートルと離れていないところに建つてあるマンションだった。管理人から鍵を受け取り、早速部屋へと向かった。

「どうちやく~」

あきはうれしそうに部屋に入る。

「う~む、ラムルさんが気を利かせてくれたのはわかるが、一人で住むにはこれは広すぎだな……」

正史は荷物を運びながら苦笑した。

「いいじやない。広々としていて、なんか自由つて感じだよね」

「あき...」

「前の家は洞窟みたいだったから余計にうれしく感じるんだ」

「.....」

「あ、そうでもなかつたかな~」

悲しそうな顔をする正史を見てあきは慌てて言つてくつらつた。
「いや、無理をしないでいよ。実際、あんな家じゃ住みづらくて
しょうがないからな」

正史はベランダの窓を開けた。

「お~、いい眺めだぞ。あきも見ていいぞ」

「ほんと?」

あきはせりつきまでの暗さを吹き飛ばし、ベランダに走った。

「わあ、ほんとだ。見て、人があんなに小さいよ」

「さすが、最上階だけあるな。あき、羽田を外してベランダから落ちるんじゃないぞ?」

「あ~、お父さんまた昔のことを見つけて。もつ私は子供じゃないんだからね!」

「「めん」「めん。さて、今日の夕食は外食にしようか。」」の街の地理を覚える意味もこめてな」

「外食?やつたね!」

「あ、がんばって残りの荷物を片付けよ!」

正史はあきの肩を軽く叩き、リビングのソファへと消えていった。

チチチ.....

小鳥のさえずりを聞きながら、あきはゆづくと体を起こした。
(私、小鳥のさえずりが流れる田舎ましまんて持つてたかな?)
まだ半分ほど眠っている頭であきはまやつと考えた。
(やうだ!)

あきは昨日のことを思い出したのか、部屋のカーテンを勢いよく

開けた。

「わっ！」

とても入りきらないうらうの日光があきの田の中に入り込んだ。

（そうだ。昨日からお父さんの仕事の都合で太陽が見える街に來たんだつけ）

あきは窓を開け、外を眺めた。外では通勤ラッシュの男性や女性が公園を行つたり来たりしていた。

（そういえば、私つて学校はどうなるんだろう？）

あきは着替えを済ませると、リビングで朝食を作つている正史にそのことを尋ねた。

「学校？ああ、そのこともちやんとラムルさんと相談してあるから安心だぞ。マンションの近くに緑王公園前と書かれたバス停があるだろう。そこから三つほど停留所を乗り継いだところにある学校なんだが……そうだ、どうせ暇なら行つてみるといい。ほら、バス代だ」

正史はテーブルの上に置いてあつた財布から小銭をくらか取り出した。

「今日は土曜日で学校も午前中で終わるだろ？からお昼を過ぎたら行つてこらん。制服の指定はない高校だから普段着のままで大丈夫だそりだよ」

「そりなんだ。私、一度でいいから制服つて着てみたかったんだけどなあ」

「まあまあ、そういうふうに行つておいで。一応明日は私も一緒に挨拶に行くが、先に下見くらいしたってかまわないだろ？」

「うん、そうだね」

あきは頷きながら食卓の椅子に座った。

太陽がちょうどマンションの真上に昇つた頃、早めに昼食を終えたあきは早速、学校に出かけることにした。

マンション前に停車したバスからは買い物客がぞろぞろと降りてき

た。あきの乗り込んだバスはほんの数分で彼女の通つ学校へと連れて行つた。

「明城学園か…」

あきは小さく校門に掘られた学校名をつぶやいた。あきはゆっくりと校内に足を踏み入れる。正史の行つたとおり土曜日は午前中のみで授業が終わるために学校に校内に残つてゐる生徒はほとんど見なかつた。

(広い学校だなあ。ここが私が明後日から通う新しい高校かあ)
あきはうれしさに呆けながら子供のようにきょろきょろと首を動かしながら歩いた。あきの強い好奇心はいつしか彼女を建物の中へと引き入れていた。

(ここ)が一年のクラスかなあ。パソコンがいっぱい並んでる)

あきはガラス窓に密着して教室の中を覗こうとしたが、曇りガラスのせいか中はよく見えなかつた。

あきは休むことなく学校探検を続けた。

(ここからは部活動の階なのかな?)

あきはどこからか聞こえる楽器の音色に耳を澄ませた。

(吹奏楽部か。前から入つてみたかつたし見学くらいしていこうかな)

あきはそう思いながら楽器の音がするほうへと足を進めていく。
だいぶ楽器の音色に近づいてきたところであきはふと田線を上にやつた。教室の上のプレートには『パソコン部』と書いてあつた。

(パソコン部つて結構ヲタクな人が多いつて噂の部活よね? 幸い曇りガラスじゃないみたいだし、どんなヲタクな人がいるのかな?)

あきは電気のついているパソコン部の教室の中をそつと覗き見た。
(あれ? 誰もいない。電気がついているから絶対に誰かいると思つたのになあ)

「こら、ここは立ち入り禁止だぞ!」

「うわあーす、すみません……つてパソコン部がどうして立ち入り禁止なのよー」

あきは思わず突っ込んだ。覗きをしていたくせになかなかの度胸である。

「あつ！」

あきは思わず言葉を失った。彼女の目の前にいたのは紛れもない、昨日出会ったあの少年だったからだ。

「やつぱり君だったね」

少年はにつこりと笑った。

「あなたは昨日の…」

「尼崎哲也だ。君は？」

「私は藤宮あき……です」

(ここに生徒だつたんだ)

あきはまじまじと哲也の服を見た。決して美形ではないが若干地味な顔立ちの哲也には少々お門違いな感じがした。

「パソコン部に興味があるって感じじゃなさそうだけど何のために部屋を覗いていたんだい？」

「やつぱりばれてたの？」

「そりゃあ、大コピー室に行ってきた帰り道にふと見たら君がいたからね。何をしているのかと思えば覗きをやつてるものだから驚いたよ」

「つう…」

あきは恥ずかしそうにうつむいた。

「それで、何をしてたんだい？ おおよそ『パソコン部にいる人ってどんなラタクがいるのかな』みたいなことを考えていたんだろ？」

「つう…」

あきは考えていることを見事に当てられて俯いた。

「やつぱりね。まあ、あえて言つならこいつラタクかな？」

哲也は自分の顔を指差した。パツと見ではそんなにラタク顔には見えないが、よく見ればラタク顔かもしれない。

「あ、あの私そういうつもりじゃ」

「わかつてゐるわかってる。別に気にしちゃいないからいいよ。実際

うちのパソコン部はそういう者の集まりだからね。ところで藤宮さんはこここの生徒じゃないよね？僕、毎年一年生の名簿リストを先生たちに作りされているけど、今年の一年生の中に君の名前はなかつたからや」「

「私は来週の月曜日からこの学校に転入するんです。今日はさすがと下見を兼ねて学校探険をしようかなと思つてきたんです」

「ふうん、よければ僕が案内してあげようつか？」

「え？でも、尼崎……先輩は部活があるんじゃないですか？」

「今日は部活じゃなくて私用できただんだ。でも、それももう終わつたしね」「

「でも……」

「案内させてよ。どうせ帰つても受験勉強しかすることがないからさ。それに生徒じゃないと知らない憩いの場所や裏山庭園に地下通路まであるからね。きっと損はないと思つよ」「

「じゃあ、お願ひしていいですか？」

「オッケー。じゃあ、行こ」「

哲也はにっこりと微笑んだ。

(それにしても裏山庭園だと地下通路だと、どんな学校なのよ)
（ここは）

あきは哲也の後ろを歩きながら半ば呆れていた。

「まずは本館から案内するね。ここは四階建ての校舎で学校の全年年の教室があるんだ。一階は職員室とか保健室とかが並んでる」「

哲也はあきの考えなどまるで知ることもなく右手で各部屋を指しながら、教師たちの評判や噂をべらべらとあきに話した。

「詳しいんですね」

「生徒の噂とかは教室とかでも流れてくるからね。先生達の情報はさつきも言つたと思うけど僕は新一年生の名簿を作つて職員室に届けるんだけどその時にね」

「なんかおいしいですよね、先生の情報が入るのって」

「うん、僕もたまにそれを悪用するんだ」

「やつぱり」

一人で笑いながら廊下の突き当たりにたどり着いた。

「IJの階段を上れば一年生の教室が並んでいて、その上は二年生、一番上は僕たち三年生の教室が並んでいるんだ」「へえ~」

「藤宮さんがこれから入ることになる教室の中を見てみるかい?」「はい。外からだけでも見ておきたいです」

「わかった。もしかしたらもう君の手続きは親父がもうしてくれているかも知れないし」

「え?」

哲也の一言にあきは怪訝そうに彼の顔を見た。

「いや、何でもない。それより来週から転入なら先生達の間で君の情報が入っているかもしれない。来週から通うのならもうクラスも決まっているだろう。ちょいと情報を仕入れていこう。ちょっと待つてくれないか?」

「はあ……」

あきは何のことだかいまひとつわからないまま職員室に入つていつ哲也を見送った。

数分後、哲也は教室の鍵らしきものを持って職員室から出てきた。「君の名前を出したらすぐに教えてくれた。君の配属教室はB組だつてさ」

「尼崎先輩、先生に聞いてきてくれたんですか?」

「そうだよ。せっかくだからこれから自分の勉強する教室を見たほうがよかろうかと思つてさ。まあ教室はどれをとっても一緒だけど」「そんなことないです!ありがとうございます、尼崎先輩!」

あきの予想以上の喜びに哲也は思わず顔を朱に染めた。一人は階段を上がり、一年生の教室にやってきた。

プシュ。カードキーを刺すと、扉が素早く横にスライドした。

(これが、私がこれから仲間たちと学ぶ教室なのね)

あきはホール上の教室をゆっくりと歩きながら珍しげにパソコン

のキーボードを触つたりしていた。

「この学校の授業は全部そのパソコンを使って行われるんだ。四世紀前では大学からやつとこのシステムだつたらしげどね」哲也はあきに向かつて言うわけでもなくつぶやいた。

「私の住んでいたところはこんな感じじやなかつた」

「シェルターでの生活の様子はこの街の人たちもよく知つてゐる。かなり荒んだ生活らしいね。でも、この街にも少しだけど荒んだ奴はいるし……そんなに違うものなのかな、太陽があるこの街と？」

「うん。学校だつてこんな立派な造りじやなかつたし、先生達の中には自暴自棄になつてゐる人もいてまともな授業なんてなかつたもの」

悲しげにつづぶやくあきに、哲也はかけていい言葉を見つけ出すことができず、そのまま立ち尽くしてゐた。言ふたのは立つた一言。

「そろそろ案内を再開しようか」

あきはその言葉に小さく頷いた。

案内を再開すると、あきは元通りの明るさを取り戻して楽しそうに校舎を見ていた。

「それじゃあ、あの時はただのハツ当たりだつたんですか！」

あきは怒鳴るように言つた。

「だから『めんつて最初に謝つたでしょ。僕は来年、というかあと半年もしたら大学受験なんだよ。なのに志望校すら決まってなくて。あの日も学校のネットからネット審査を受けたんだけど見事に落ちちゃつてね』

「それでハツ当たりですか」

「まあね。君に愚痴を言つてもしようがないのはわかつてゐるけど、実力はあると思うんだよ。学年模試でもトップ十位に入つてるし。でも、受ける大学がシェルターの街の中の大学だからな。出身地の時点で落とされてしまつんだ。やっぱり、よく思うはずはないよな。この街だけ市長のおかげでシェルターを作らなくともよくなつた。そのせいでほかのシェルター入りした街の科学者達から非難を受け

た

気のせいか若干哲也の声が大きくなっているように聞こえた。

「悔しいのなら藤宮博士みたいに行動に移せよー！うちの市長は人がいいから絶対に教えてくれるはずだ！なのに藤宮博士以外の科学者達は技術を盗みに来る」とすらしゃしない。何でだと思ひへ.

「わからない…です」

「見栄さ。市長にこの街の技術の教えを講いつゝとは市長が世界で一番の科学者とこうことになるだろ？」

「あ……」

「それが嫌で誰もこの街に足を踏み入れない。でも、藤宮博士は違つた。自分の名声なんて考えないで人々のために働いて。あの人がそ本当の科学者であり人間だよ」

哲也の言葉にあきは返す言葉もなくその場に立ち尽くした。

「『めん、また君にあたりちらす』ように言つてしまつて。でも、数いる科学者の中で憧れなのだ、藤宮博士は」

日が暮れ、二人は学校の校門で別れた。

「今日は案内してくれてありがとうございました」「いやいや。こっちこそ無理矢理誘つて『めんよ』

「じゃあ、私はバスだから…」

「あ、ちょっと…」

去ろうとするあきを哲也は慌てて引き止めた。

「名前聞いた時からずっと気になつていたんだけど、君は藤宮博士

の

「ええ、そうですよ」

「やつぱりそなんだ。じゃあ、近いついで君の家に行つてもいい

かな？」

「はい？」

あきは一瞬哲也の言葉が理解できなかつた。彼女の心情を読んだのか、哲也は慌てて弁解する。

「変な意味じゃなくて、博士に会つてみたいだけさ。やつぱり、そ

の、ファンとしてセ」

哲也の顔が少し赤くなるのがわかつた。あきは微笑すると、「聞いておきますよ」と言って、今度こそバス停に向かって歩き出した。（驚いたなあ、お父さんのファンがいたなんて。ショルターの中でもそんな話を聞いたことなかつたし）

そんなことを考えるあきの口元はいつの間にか緩んでいた。（やっぱり身内のファンがいるってのは嬉しいな。お父さん、どんな反応するかなあ）

あきの口からは思わず笑いが漏れた。

STAGE2

STAGE2 ホームパーティ

「ホームパーティ？」

あきはまだ湯気を立てている味噌汁の入った汁椀を丁寧に置きながら聞き返した。汁椀からは味噌の匂いと朝日のように暖かい湯気が立ち込めていた。

「この街にもだいぶ慣れてきたし、何よりラムルさんが我々に引っ越し祝いをしたいと仰るんで、どこか食べにいこうというのだが、せっかく私達の引越しパーティなのだから自分達の家でやろうと思つてね」

「でも、それだと買い物にいかなくちゃいけないよ?私は学校だし、お父さんも研究があるんじゃないの?」

「なあに、今日は研究を早めに切り上げて買い物は私がしておくよ。それならいいだろ?」

正史の口調から察するに、彼はどうしてもパーティを開きたいようだった。そんな父の思いに駄目だしすることなんか、あきにはできなかつた。

「よし、それじゃあ今田はあきもお友達をいっぱい連れてきなさい」「うーん、急にそんなこと言われて皆来るかなあ」

「まあ、無理に連れてくる必要はないよ。

我々だけでこちんまりとやるのも悪くはないが、どうせなら大勢で楽しくやりたいからね」

「わかった。とりあえず誘つてみるね」

あきはそう言って、小さく微笑んだ。

同じクラスの友人に相談すると、友人は快くパーティの参加を希望した。皆、予定があるのでないかと考えていたが、そんな話は微塵も出なかつた。

学校にいる間中、あきは誘える友人達を誘えるだけ誘つた。中にはやはり予定が入つていたりした者もいたが、終業時間までには十分な人数が集まっていた。

（でも、よくよく考えたら「うちはそんなに広くないし、みんな入りきれるかなあ）

あきはそのことを若干気にしていたが、父の言葉を思い出すと、それもいいかと思えるのだ。

（そうだ。あと一人、絶対に参加して欲しい人がいた）

下駄箱まで来ていたあきは靴を履き替えるのを止め、部活動棟に向かつた。

向かつた場所は部活動棟の一階にあるパソコン室、パソコン部の部室だ。今日は活動が休みじゃなかつたらしく、中にはあきの予想していたようなヲタク達がパソコンの並ぶ机に一列になつて座つて、キーボードに触つていた。

さて、この中からどうやって哲也を見つけようか。あきの一番の問題点はそこだつた。人に聞けば変な意味合いをもたれてしまう可能性がある。それだけはあきとしては避けたいところだつた。

「藤富さん？」

策を練つている最中のあきの肩にポンッと手が置かれた。びっくりして振り返ると、そこにいたのは、噂の本人その人であった。「やっぱり藤富さんだ。どうしたんだい、こんなとこにきて？」

「あ、尼崎先輩」

本人から声をかけてもらつてあきは安堵したが、少し情けない気分ではあつた。そんな表情が顔に出ていたのだろうか、哲也は「どうかしたの？」と心配そうに声をかけた。あきは「なんでもないです」と苦笑した。

「ここで立ち話はなんだから、廊下で話そつか」

哲也は他の部員達に断りを入れ、あきを廊下に連れ出した。

「ありがとうございます」

「部長だったんですね」あきは意外と言わんばかりの顔を哲也に向

けた。

「まあね。この部屋で話していたら他の男共が気になつてしまつがないだろ?なんか言いづらそうな顔していたし。それで、用件は何?」

「あ、はい」

あきは朝の話を哲也に伝えた。

「僕も来ていいの?」

「はい。是非どうぞ」

「ほんとにいいの?」

哲也が確認するように問いただすと、あきは優しく微笑みながら頷いた。

「先輩、前に家族のことを話してくれましたよね」

あきはそう言いながら、先日哲也から聞いた家族の話を思い出した。

それは、あきがラムルには家族がいるのかと哲也に質問したことが始まりだった。

「家族?確かに、子供が一人いた気がするよ

「へえ、会つてみたいな」

あきの願望に哲也は「近いうちに会えるんじゃない。案外もう会つているかもよ?」と曖昧な返事をした。もちろん、そんな哲也の態度にあきは怪訝な顔をしていた。

「尼崎先輩はラムルさん、この街の市長さんについてじつ思っていますか?」

「市長を?」

哲也は空を見上げながら考えた。それはどちらかと言えば、考えているというよりかは思い出しているといった表現のほうが近いかもしれない。

「あの人は優しい人……かな。困っている人を放つておけない人で、それがどんなにみずぼらしくても、どんなにみつともなくとも必ず助けるんだ」

哲也は言い終わった後に「僕も、その助けられた者の一人なんだ」と懐かしいそうにつぶやいた。

「尼崎先輩が？」

意外な一言だった。それだけにあきはその一言しか口に出せなかつた。と、同時にさつきの子供がいるという話は彼のことだとわかつた。

（だからあんなふうに言つたのね）

哲也はそんなあきの心情に田をやりながら、自分の全てを話した。「僕の本当の両親はいないんだ。と言つても死んでいるのかはわからない。シエルターができて、太陽の恐怖から逃れられたから、もしかしたら生きているかもしれない。今から十一、三年ほど前に、僕は市長に拾われて育つたから。だから、今はあの人があの人が僕の父親代わりかな」

「そうだつたんですか」

あきは申し訳なさそうに謝つた。

「別にいいんだよ。僕が話したくて話したんだから」

哲也は気にした様子もなく、穏やかに笑つた。

「あのときの話を覚えててくれたのかい？」

「はい。だから、余計に先輩には来て欲しくて」

「ありがとうございます。是非、行かせてもらひます。それで、いつやるんだい？」

？」

「今夜です」

あきの一言に、哲也は急に申し訳なさそうな顔になつた。

「実は、今夜は予定がもう入つているんだ」

哲也は本当に残念そうに言つた。

「市長が今夜出席するパーティに僕もついていかされるんだよ。そのメールがついさっき届いたんだ」

「そりなんですか？ 残念です」

あきはしょんぼりうなだれた。

「「めん、せつかく誘ってくれたのに」

「いいんですよ。今日のパーティ、楽しんできてくださいね」

「ありがとう。藤富さんも楽しんできてね。そうだ、今度は僕が君

をパーティに誘うよ」

哲也なりの思いやりなのだろう。しかし、あきは首を横に振った。
「だめですよ先輩。先輩は受験生なんだからしつかり勉強しないと
ね」

あきの激励に哲也は心底嫌そうな顔をしていた。哲也は見た目こそ真面目そうなのだが、実は意外にも勉強が嫌いなのだ。

「先輩、ちょっとといいでですか？」

部屋のドアが開き、中からパソコン部員が出てきた。

「ああ、すぐ行くからちょっと待つてくれ。それじゃ藤富さん、また機会があつたら会おう。なんなら、パソコン部にきてくれてもかまわないよ。いつそのこと入部しちゃつたりしてね」

「アハハ、それはちょっと……」

あきは苦笑しながら部室を去つていった。

学校から帰る途中のバスの中、あきは電子メモ帳に今日のホームパーティに参加する人数を数えていた。

(結構誘つたけど、結局来てくれるのは五人か。まあ、そのくらいがちょうどいいか。お父さんもきっと、ラムルさんの会社の人を誘つたりするだろうし)

あきは電子メモのメモリから古いものをディスプレイに表示した。(大人がくるんだから、少しあお酒のおつまみも作つとかないといけないよね。お母さんが残してくれた料理メモの中に、それっぽいのがあるといいけど)

あきは料理の腕はかなり良い。もともと、料理に縁があつたわけではなかつたが、母親が病氣で亡くなつて以来、家事をする人間が

いなくなってしまったため、あきは母親の部屋から見つけた料理メモを頻繁に活用しながら料理の腕をあげていったのである。

(お父さん、私達用にちやんと軽いお酒やワインも買っててくれるといいけど)

あきはバスの窓からひらりと見える夕陽を眺めながら、そんなことを考えた。

家の鍵は閉まっていたので、どうやらまだ正史は買い物中であることがわかった。あきは父親にワインを忘れないようにメールをするか悩んだが、父を信頼し、自分は今日のパーティの料理に取り掛かることにした。

(おつまみ系は必須でしょ、それから友達用におしゃれな料理も入るで……と)

あきは作る料理の品を頭の中で決めながら、てきぱきと野菜や肉の下準備に入る。今日は何を作ろうかと思つと、ついわくわくしてしまうものだ。あきはいつのまにか鼻歌を歌つていた。

パシコ。家のドアが開く音がした。正史が帰ってきたのだ、と思いつながらもあきの料理をする手は休まらない。

「ただいま」

「どうしたの、ご機嫌だね?」

「そうか?人を呼んでパーティーをするなど久しぶりだからな。心が躍るんだよ。日本酒もいいものがいっぱいあったしね」

正史はこの時代では稀にも見ない日本酒派だった。いや、普通の酒を好むという時点でかなり珍しかった。二十世紀末から二十一世紀中ごろまでは流行っていた日本酒だが、今ではほとんどの人間が機械の作った、ただ酔うためのジャンクアルコールを好むからだ。

「ワインはあった?」

あきが聞くと、正史は微笑を絶やさぬまま「もちろんあるぞ」と、袋からそこそこ値段の張りそうなワインを取り出した。

「お父さん、そんな高そうなワインじゃなくてよかったのに。そちら辺に売っている果実酒でよかつたんだよ」

「いいじゃないか。今日は楽しい夜をするんだから、このくらいはいかないと」

「お父さん、完璧に私が未成年だつて忘れてるでしょ」

「大丈夫だよ。今日は市長さんがくるんだから、多少のことはあるに見てくれるわ」

正史の上機嫌は今日いっぱい続きそうだ、あきは父のあまりの浮き足立ちように少し呆れながらも、料理だけはしっかり作つていつた。

（あれ？今日ラムルさんは他のパーティに行くなつて言つてなかつたつけ？）

あきは学校で聞いた話を正史にしたが、正史は「うん、朝にラムルさんのところへ行つて本人と会つたけどそんなことは言つてなかつたぞ？」と、首を捻るだけだつた。

「役所の人達は大体参加するから来るとは思うのだが、……とにかくで、

今日も美味しいものをつくりたいんだな」

「あ、うん。今日はお客さんがいっぱい来るし、お酒のおつまみも用意しないといけないと思つたから奮発したよ」

「お前もこんなに豪勢なものを作れるようになつたんだな」

「アハハ、昔はつぶれた目玉焼きを作るのがやつとだつたのが嘘みたいだよね。私もびっくりだよ。これも全部、お母さんのおかげだね」

「お母さん、か」

正史は何もない天井をふと見上げた。

「千春の料理は天下一品だつた。彼女もきっと天国で満足してくれているに違ひない。自分の子供が、自分のレシピをこんなに立派に再現してくれているのだからな」

正史の田に向つすらと何かが光つた。

「もうすぐお母さんの命日だね」

天井に向かつて昇る湯気をあきは田で追いながらつぶやいた。

「もう、か。早いなあ」

同じよつに湯気を田で追いながら正史がしみじみとつぶやいた。

あきの母、千春はこの暗黒の時代を吹き飛ばすよつ明るくて気さくな女性だつた。そういうれば、彼女もまた早くに両親を亡くして、家事を切り盛りするよつになつたのだとか。

(親子の血は争えないといふことか)

正史の中には今でも、病気になる前の明るい彼女がいた。千春は、シェルターでの生活に慣れることができず、最初にシェルターネで大流行した病気にかかり、その短い生涯を終えた。

(千春、君にも見せてあげたいよ。私の夢でもあつた、この風景を(?)

「まだ、駄目」

「え?」

正史は閉じていた目をはつと開いた。確かに今、何かが聞こえた。

「これは貴方の望んだ風景じゃない」

やはり聞こえた。そして、この声は……

【この風景は仮初の姿。早くまやかしを破つて。取り返しがつかなくなる】

「待てーーー」とだー!

「急いで……」

声はその一言を最後に再び立ち込める湯気の中に消えていった。

「どうしたの、お父さん?」

あきは怪訝そうに父親の顔を覗き込んだ。正史の額には二つの間にかじつとりと脂汗がにじんでいた。

(今のは彼女なのか?この風景が仮初とは一体どうこいつなんだ?)

正史の耳には、もはや娘の声など全く入つてこなかつた。

STAGE3

STAGE3→予兆

ピンポーン。家のチャイムが鳴つて、次々と人の波が押し寄せてきた。

まず入ってきたのはラムル一行。それぞれの手には酒瓶や、すぐそこのスーパーで買つてきたつまみの入つた袋を持つ者の一通りに分かれていた。

「やあ、お言葉に甘えてのこのことやって参りました」

「よつ」Jヤラムルさん。あれ、そちらの方は?」

正史の皿にとまつたのはラムルの横にいる真面目そうな少年。

「ああ、これは私の息子です。と言つても本当の息子ではないのですがね。哲也、こちらが少し前から話していた藤富博士だ」

（お、お邪魔します初めまして藤富博士、お会いできて光榮です「
実物に会えて緊張しているのだらうか、哲也は少しばかり早口だ
った。

「哲也は博士の大ファンとしてね。今日のパーティをとても楽しみにしておつたのですよ」

「それは光榮です。哲也君、いつもお父さんにはお世話をなつています」

「い、いえ。恐縮です」

哲也はスッカリ縮こまつた話し方しかできなくなつていた。

「さあ、役場の皆さんもどうぞリビングのほうへ。今夜は目一杯楽
しみましょう」

ピンポーン。正史がラムル達をリビングに案内しようと、ちょうど振り返つたときにはタイミングよくチャイムが鳴つた。

「きっと私の友達だ。お父さん達は先にリビングに行つてて」

「わかった」

正史は小さく頷くと、ラムル達をリビングへと招きいれた。

ドアを開くと、あきのクラスメート達がぞろぞろと押し寄せた。あきは軽く挨拶をしながら、彼女達をリビングに案内した。「本日はようこそ我が家にお越しいただきました。たいしたものもございませんが皆さんの日ごろのお疲れを癒す場にしていただければ幸いです。では、乾杯」

「かんぱーい！」

総勢十八人による乾杯の合唱。たつた、その一言だけなのになぜか笑いが収まらなかつた。

正史はラムル達と、あきはクラスメート達と共に時間を忘れ歓談にいそしんだ。そして、この年代の少女たちが集まるどどづしても起ころる会話が、彼女たちの間でも例外なく行われた。

「ねえねえ、あきはさ、うちのクラスでいいなあつて思つ男子はいるの？」

「えー何それ？」

あきはわざととぼけて見せるが、友人の一人に羽交い絞めにされて言え言え「ホールを受けてしまう。

「うーん、特に私がいいと思う人はいないかな。そういう佳奈ちゃんはいるの？」

「え？ ちょっと、何であたしに振るのよ？」

「佳奈に質問しちゃ駄目だよ。この子にはもう、ちゃんとした男性がいるんだもの」

「ねえ～」

佳奈と呼ばれた少女はあき以外の女子全員の冷やかしの視線をいつせいに浴びた。

「も、もういいじゃない。その話は。他の話題にしよ

佳奈は話をはぐらかそうとするが、そこまで聞いてみすみす聞き逃すのはあきの性格が許さなかつた。今度はあきが佳奈を羽交い絞めにする番だつた。

「佳奈はねえ、三年生の先輩に彼氏がいるんだよね」「そうなの！？」

あきの真剣な眼差しに佳奈は観念したのか小さく頷いた。一瞬、あきの脳裏を不安という一文字がよぎった。

「サッカー部の先輩よ。私がマネージャーで」

「へえ～」

あきは笑うことで何とか平静を保つているように見せた。内心は、それはもう安心感でいっぱいだった。

「やっぱり高校生になつたんだから彼氏くらいは作つておきたいよねえ」

友人の一人がぽそりとつぶやいた。

「そういえば、男の人の中で一人私たちと同じくらいの人を見たよ」

「ああ、あそこで博士達と話してる人でしょ。あの人、市長の息子なんだって」

「悪くはないんじゃない？」

「悪くはないけど、あれはけつこうタクって感じじゃない？」

「ああ、そう見えなくはないかも」

ああ、女性はどうしてこういう話に田がないのだろう。この少女たちを見ていると自分が女性だという意識が少し薄らいだ感じがした。

(シールター内の学校では皆あまりこういう話には無関心だったからな。日々、生きることで精一杯といふか。これが普通の会話なのかもしれないな)

あきは複雑な心境のまま、その後もずっと友人達の色恋話に付き合つた。

夜はあつという間に更けていき、招かれた者達は自分の帰るべき場所へと帰つていった。

「親父！お・や・じー！困ったなあ、ぜんぜん起きやしない」

哲也は深いため息をついた。

よっぽど楽しかったのだろう。ラムルの顔は眠っているところの元
眩いほどに嬉しそうだった。

「夢の中で、まだパーティーを続いているのかな？」

正史はそう言って微笑した。

「起きるまで待っていてあげなさい。なに、私たちのことなり気に
しなくていいから」

正史は優しく微笑みながら「何か上にかけるものを探してこよう」と言つてリビングを去つていった。

(まつたく……)

哲也はソファで気持ちよさそうに眠るラムルを見下ろした。

「楽しかった？ 親父……」

「気のせいだらうか、哲也の問いかにラムルが寝ぼけながら頷いた。
「よっぽど楽しかったんですね。今、先輩の問いかけに頷いていま
したよ？」

哲也の後ろではいつからいたのか、あきがおかしそうに笑いなが
ら立っていた。

「聞いてたの、今の？」

哲也は恥ずかしそうと言つと、あきはにんまりと笑つて頷いた。

「意外とお父さん思いなんですね。先輩くらいの年の人には、親に対
してもつと冷たいものだと思ってました」

「確かに冷たい奴のほうが多いな。けど、この人は本当の父親でな
いにすれ、僕の大切な人なんだ。気遣うのは当然だよ」

哲也とあきはしばらくそのままラムルの寝顔を見ていた。

「先輩の言つていたパーティーがうちのパーティーだなんてちょっとび
っくりしました」

あきが不意につぶやいた。

「僕もびっくりしたよ。どうせいつもみたくホテルを貸しきつて、
役場の皆とパーティなのかなと思つてついていつたら近くのマンシ

ヨンだつたからや」

哲也は「君に会えて嬉しかったよ」と、自分で言いながら俯いた。暗がりでわからなかつたが、おやりく照れているのだり。

「そういえば今日の料理はすごく美味しかつたけど、ビルの店で注文したんだい？ あんなにうまい料理を作る店なんてあつたかな？」
「あれは全部私が作つたんですよ？」

「ええ、 そつなのかい？」

「信じられないですか？」

あきは得意そつに上目遣いで哲也の顔を見つめた。

「素直に驚いた。君はどちらかとこりと家庭科系よりは運動系のほうが得意そつに見えたものだから」

「クラスの皆からも言わされました。でも、なんじことはないんですよ。私の家では家事をする人はいませんから」

「え？」

哲也が怪訝な顔をするのを横田に見ながらあきは続けた。
「私のお母さんは、病氣でもうこないんです」

「！－！」

「お父さんは研究の毎日だから家事をすることはできない。必然的に家事は私の仕事になつたんです」

「そつだつたんだ。お母さんが……」

「でも、私は自分が家事をやらされていふと思つたことは一度もないですよ」

「一度も？」

自分ではありえない話だ、哲也は田の前の少女に尊敬の念を抱いた。

「掃除や洗濯は終わつた後の達成感がたまらないです。料理はいろんなものを覚えて、それが美味しいできたときには感動ものですね！」

「へえ、すごいんだね」

男の哲也にはどうもこまひとつわからない思考だった。あきは「

そんなものですよ」と明るく笑つた。

ラムルの耳元で話をしていたためか、熟睡していたラムルは案外早く目を覚ました。

ソファから起き上がり立とうとするが、まだ酒が残っているせいかふらふらと壁にもたれかかってしまう。

「お、親父？ 無理するなよ？」

「なあーにを言うか。あたしゃ、正氣だぞお？」

「いや、自分に問い合わせてどうするんだよ」呆れる哲也の横であきも苦笑していた。

「おや、起きたんですか？」

厚めの毛布を両手に抱えながら、正史は「もう少し休んでいかれたらどうですか？」と優しく微笑んだ。

「いえ、せっかく起きたようですので僕達もそろそろお暇します。博士、今日は親父共々お招きくださいありがとうございました。至らぬ父ですが、どうぞこれからもよろしくお願ひします」

「わかりました。哲也君もどうかこれを機会に娘と仲良くしてやってください」

「はい」

哲也ははつきりと返事をして、大きく頷いた。

尼崎一家も帰つていき、あきと正史は協力して後片付けに入つていた。

「あ……」

あきが持つっていた皿は氣づいたときにはもう床とぶつかっていた。

「あき！」

正史は慌てて愛娘の側に駆け寄つた。

「大丈夫か？」

正史の問いにあきは力なく頷いた。

「ちょっとお酒を飲みすぎちゃったかもしねないね」

あきは微笑するが、その笑顔はどこか弱々しかつた。正史はそれを察し、あきにもう寝るようにと促した。

「何、後片付けなんて明日でもできるさ。今日はお前もいっぱいはしゃいで疲れたんだろ？ ゆっくり休みなさい」

正史の優しい一言にあきはやはり弱々しく頷くだけだった。

(ショルター内で風邪すらひいたことのなかつた子が急にあの弱り様とは。何か嫌な予感がする)

リビングに一人残された正史は割れた皿の処理をしながら、そんなことを考えた。

STAGE 4

STAGE 4～正体～

ホームパーティから一週間が経過した。あきの病状は日に日に悪くなり、ホームパーティからちょうど一週間経った今日、彼女は入院という形になつた。病院なら少なくとも自分の作る食事より栄養があるものが食べられて、すぐに病状もよくなるだろうと、正史が判断したからだ。しかし、あきの病状は病院の薬でも効果がなく、病状は悪化の一途をたどつていた。

一方、あきが入院した日の翌日から哲也は毎日のように病院に赴き、あきの見舞いにやつてきた。クラスメート達もちょくちょくやつてきた。あきは最初のうちは明るく返事を返していたあきだったが、病状が悪化するに連れ、彼女の返事には元気さを感じなくなつていた。

そして、あきが入院生活を始めてからついに一ヶ月が経つた。哲也は学校を終え、いつものように病院へと向かうバスに乗つていた。今日の見舞い品はいろんな種類のハーブが入つたハーブティーだ。今では決して取れることのないハーブだが昔は様々な料理の香り付けに使われていたらしい。元々香りが強いため気付け薬としても十分な効果を發揮したそうだ。これなら今の彼女の体は受け入れてくれるという自信があつた。

「こんにちは」

哲也は病室に入ると、最初に正史に挨拶をする。

「やあ哲也君、今日もきててくれたんだね。あきに変わつて礼を言つよ。ありがとう」

「そ、そんな。博士、頭を上げてください」

正史に深々と頭を下げられ、哲也は慌てふためいた。気を取り直して、彼はかばんから日本中で、いや世界中でお目にかかるかど

うかわからぬハーブティーの入った水筒を取り出した。

「今日はハーブティーを持つてきたんです。昔は気付け薬として使われていたくらいですから、きっとあきさんにも効果があると思つて」

自信たっぷりで水筒のコップにお茶を注ぐ哲也に対し、正史の反応は冷たかった。

「哲也君、君の厚意は本当にありがたいものばかりだ。だが、あきはもう、物を食べることができなくなつてしまつたようなんだ」

正史の言葉に哲也は頷くことも、言葉を返すこともできなかつた。

「じゃあ、彼女が死んでしまうのは時間の問題……？」

「いや、一応点滴は打っているからそれはない。だが、このままではいざれは……」

病室内に重い沈黙が訪れた。

「パー・ティーの翌日から病状が発覚したんですね？」

「ああ。君ももう感づいていると思うが、この病状は風邪ではない。
おそらく外界のウイルスに感染したと考えられる」

「外界ですか？」

「うむ。我々は数ヶ月前まではシェルターの中で生活をしていた。シェルター内は常にあらゆるウイルスに対するバリアのようなものが張られていた。それが仇になつてしまつたのだ」

「そうか。いかなる病原菌も通さないということは、その分全てのウイルスに対する手効力が落ちてしまつているんだ」

「その通り。病院の精密検査の結果が出てないのでまだなんとも言えないが、ウイルスはきっと見つかる」

「ええ、そうですとも！」

哲也は大きく頷いた。

(そもそも、この時代の医療ならきつと見つかる。きっと、だ)

そう信じるしかなかつた。なぜなら、今の哲也にできることがそれくらいしかなかつたから。

数日後、正史はあきの主治医に呼び出された。検査の結果が出たのだろう。正史は早く、あきの中に巣食う者の正体を知りたかった。だが……

「今、何と言つた？」

正史の体はわなわなと震えていた。

「そうだ、こんなことがあつてはならないのだ。

「あきの中に、娘の体内にウイルスが見つからなかつただと? そんなばかげた話があるものか。私が今、冗談を聞ける状態でないことをくらいわかつているだろう! 真実を話せ! 娘の中にいるウイルスは何だ!」

興奮する正史に対し、主治医は冷静だった。小さく首を横に振り、数分前と同じように言つた。

「あきさんの体にウイルスらしきものは見当たりません。あの子の病状は精神的なストレスによるものと判断してよいでしょう」

もし正史に理性というものがなかつたなら、今頃彼はこの主治医を絞め殺していただろう。

「ストレスだと? 確かに病状はそれとそつくりなものが多い。だが、娘には何のストレスもないはずだ。あの子はいつも学校から帰つて、夕飯になつて、私にいつも学校の出来事を話してくれていた。そんなあの娘の中にストレスの因子となるものは一つもない。あの子がストレスなどあり得ない!」

「では、彼女の病気の原因は何だというのです?」

主治医の冷淡な言葉が正史に突き刺さつた。もちろん、正史はその問い合わせに対して答えることはできず、ただ悔しそうに唇を噛み締めるしかなかつた。

「いつたい何が、いつたい何があの子を苦しめているというのだ!窮地に陥つた正史は誰に向かつて叫んだわけでもなかつた。目の前にいる医者は腹立たしいが、全て事實を言つたのだ。」

「あの子の病状は絶対にストレスではない。絶対にそれを突き止めてやる！」

正史があきの病室に戻ると、いつものように哲也がいた。彼は、あきに今日起こった出来事でも話しているのだろうか。

「哲也君、ちょっとといいか？」

いつにない正史の表情に、哲也は怖気立つた。

正史はあきの検査結果も含めて、全てを哲也に話した。

「そういうわけで私はしばらく元の研究施設に帰る。そこで、あきの病気の正体をつかみ、彼女用の抗体を作る作業に入る。君にお願いしたいのはここからだ。私は今言った理由でしばらくあきのそばについてやることができるから、君に看病をお願いしたい。あきは君に懐いているし、私よりも君のまづが安心すると思つのだ」

「は、博士」

ほとんど勢いに任せて喋つていい正史に、哲也はなんとか自分の提案を切り出すことができた。

「僕も行つてもいいですか？僕もあの子の病気を治したい」

哲也は自分の心のうちに秘める彼女への思いも含めて、全力で言つたつもりだった。しかし、今の正史には到底届くはずもなかつた。「哲也君、まだ子供の君に人を治すといつ任せ重すぎる。これは私の問題なのだ。君は私の願いだけをかなえてくれていればそれでいい」

正史がその後、哲也を振り返ることはなかつた。

「

STAGE5

STAGE5～真実～

正史がショルターに戻つてから一ヶ月が経過した。

哲也は正史の言いつけどおり、あきの看病をしていた。この頃、あきの病状は若干だが回復したように思える。その証拠に、彼女は病院の食事を少しづつだが食べ始めるようになったのだ。

「すじいね、あきちゃん。今日は半分も食べられたじゃないか！」

哲也はまるで、自分の家族が食べて喜んだ。

「私もびっくりだよ。ほんの数日前までは飲み物すら受け付けなかつたのに」

あきははにっこりと微笑んだ。

「食べられるようになつたなら回復まであと少しですよ。がんばって！」

「うん！」

あきは本当にうれしそうだった。

(そりやそりや。今まで苦しんできたんだからな。これを機に回復していくといいな)

そう思つ哲也の心の中では、少し腑に落ちないことが起こつていた。というのも、以前、かなり前に自分自身もこんな姿を誰かに見せた覚えがあつた。

(だんだん病状が悪化していつて、しばらく経つと何もしてないのに自然に治る病気。僕もかかつたことがあつたような……) パシュ。

病室の扉が開き、外からは久しぶりに見る顔がこちらに向かつて歩いてきた。しかし、どうも様子がおかしい。あきの病気に対する手立てができたのならもつと嬉しそうにしていいべきだ。なのに、

「この男の表情は嬉しさとは逆に、怒りに満ちていた。

「哲也君、ちよつときてくれ！」

正史は哲也がうんと頷くと前に、その手をとり、強引に病室から出て行った。

「博士、いつたいどうしたんです？久しぶりにあきたこと会ったのだから一聲くらいかけてあげても……」

「そんな時間はない！役場へ急ぐぞ！」

正史は哲也の言葉を強引に遮るとせかせかと廊下を早足で歩いた。「おつとそ�だ」正史は思い出したように白衣のポケットから薬の呑み物を取り出した。

「これは君に預けておく。今日中に飲むんだ」

「僕が飲むんですか？あきさんではなく？」

「そうだ。急いで飲まないと手遅れになるかもしれない。私はもう一度と、君達のような若者を奴に奪わせたくないんだ」

正史はそう言つと、また廊下を急ぎ足で歩いていった。

（博士の言つてこむの）との意図が読めない。いつたいどうしてしまつたんだ？）

哲也はとりあえず正史についてこくこくした。行く場所が役場といつもの気にならなかった。

役場につくなり、正史はラムルを呼び出した。

「久しふりですね、貴方がここを訪れるのは、あきさんの病状はいかがですか？何か薬を開発されたのでしょうか？」

いつものように人並たりよくラムルに正史は「違つ」と一言つぶやいた。

「私が開発したのは哲也君のための薬。そつ、貴方の手から哲也君を解放するためにね！」

正史の言葉に一番動搖したのは哲也だった。なぜ、自分が薬に頼らなければいけないのか？どうして彼は実の娘を救おうとしたのか？

動搖する哲也の横でラムルは嘲笑した。

「これはおかしな話だ。哲也を私の手から解放すると仰るとはまたきつかいな話だ。あきさんることはほり、どりでもよいということですかな？」

「あきの病気は間もなく回復する。その後に、あの子にも哲也君に渡した薬を飲ませるつもりだ」

「ほう。なかなか興味をそそる話のようですね。少しお聞かせ願いますかな？」

ラムルは正史をどこか探る目で睨んだ。

正史はそれに臆せず、硬い表情のまま頷いた。

「全て話してやるよ。あきの病状についても、この街がどうしてシエルターなしで過ごさせていたのかもな！」

哲也は訳がわからなかつた。この二人はいったい何を言つているのか、そして、今まで見たことのない自分の父親の表情は、まるで獲物を狙う動物のように鋭かつた。

「私は研究所に戻つて、秋の病気の原因を調べているだけのことでもないことを発見した。それがこの街のからくりだ」

正史は白衣のポケットから、あの日ラムルが渡した薬の入った小瓶を取り出した。

「单刀直入に言おう。この薬は麻薬だ」

「え？」

哲也は正史の言葉に耳を疑つた。今まで自分を、この町の人間を救つてきた薬が麻薬だつたとは信じられなかつた。哲也のそんな心情をよそに正史は説明を続けた。

「この薬に紫外線を防ぐ効果などない。それどころか、この薬は人間に紫外線を防ぐ効果があるということを植えつける薬、つまり麻薬なのだ！」

「……その根拠は？」

ラムルはあくまで冷静に正史の説明を聞く。

「この街はもともとならず者達の住み場だ。しかも、その当時、こ^レは汚染の広がっていた危険地域でもあつた。なのに、不良達は逃

げもせず住んでいた。なぜか？それは、この薬と同じような麻薬があつたからだ。これは私の推測だが、街の近くに麻薬の取れる場所でもあるのだろう。いつものように、麻薬を取りに行くと、そこで見たことのない麻薬を見つけた。試してみると、太陽の元にいてもなんともなくなつた。そこでお前達は考えたのだろう。この麻薬を一般化させようと

正史がそこまで言つと、今まで正史の説明を黙つて聞いていたラムルが急に不敵な笑みを浮かべた。

「やれやれ、流石は日本が誇る天才科学者だ。わずか一ヶ月でそこまで調べ上げ、さらに具体的なここまで推測するとはな」

「お、親父……？」

哲也はどうしてよいかわからなかつた。絶対に否定されるべきことだと思っていたのに、目の前にいる自分の父親は、このぼんくら科学者の言ったことを素直に認めてしまつたのだ。

「お前にもいつかは話さなければと思っていたが……今がその時だ。私がこの街の市長として就任したことも含めて、全てを話してやろう」

もう三十年以上も昔の話だ。私は旧ロサンゼルスでは札付きの悪人だつた。あるとき、私の管轄していたグループがへまをして、全員に国流しの刑を言い渡されたのだ。そしてやつてきたのが日本だつた。当時、第五次世界大戦の影響で汚染もひどかつたから、私たちのような者を追放するには十分な場所だつた。

ここで生活するのはしんどかつたよ。いや、しんどかつたなんてものじやない。いつ死んでもおかしくなかつた。その時だつて紫外線による病気は流行つていたから、それで死ぬ者も少なくなかつた。十六年前、日本の科学者達が隣を集めて作り上げた紫外線遮断ドーム、シェルターが作り出された。悪人だけの東京跡にもそれは作

られた。私がこんな奴らのために作る義務があるのかと聞くと、日本人の科学者はどんな者にも人権はあると答えた。全く、日本という国は何百年経ってもお人好しの集団ばかりだと思った。しかし、私達も若くして死にたくはなかつたから行為だけは素直に受けさせてもらつたがな。しかし、やはり今まで外の空気に触れていたものだから、なまじ暗い空間に閉じ込められると嫌気が差してきてね。我々の中の一人が監視の者を全て暗殺し、シェルターの外に出た。行き先は、我々がここに来て以来通つていた、麻薬の草原。いつものように麻薬を集めていると、隅のほうに見たことのない草を見つけたのだ。それを試しに使ってみると、どういうことだろう。ここにくるまで苦痛の種になつていていた体を刺すような太陽の紫外線が急になんともなくなつた。コンピューターに精通している者が後でそれを調べてみると、その草は全世界で未登録のものだつた。我々は、その草に名前をつけた。

サン・ライズ、日の出という意味だ。世界が暗黒に包まれる中で、自分達だけが太陽の光を浴びて生きている。まさに神聖な者であると信じ込んでね。

「それじゃあ、僕らの命は……」
「ああ、急速に、かつ確実に死へと向かつているだろうな」
「そんな……」

哲也は自分の顔から血の色がなくなつていいくのがわかつた。

「お前は今まで何の病氣にもかかつたことはないが、それは表に見えないだけだ。きっと、お前の中には何かの病氣が蝕んでいる」

哲也はもう何も答えることができなかつた。ラムルは、そんな哲也に向かつて話を続けた。

「今、お前も私も含めて、この地に一本足で立つてゐる奴は、かな

りの強運の持ち主といえるだろう。まあ、人生は博打だと言つ時代もあつたんだ。このくらいなんてことはないだろう？」

愉快 そうに笑うラムルに、哲也の中の何かが音を立ててキレた。

「この位ですまされる問題じゃない！親父は人としてしてはならぬことをしたんだぞ！？しかも身内の人間だけじゃなく、この街の人間全員に！僕は親父を人として尊敬していたのに、最高の科学者だと信じていたのに……！」

哲也はいたたまれなくなり、部屋を飛び出した。ラムルはそんな息子を追いかけようともせず、ただ微笑するだけだった。

「完全に嫌われたかな？」

小さく笑い続けるラムルに、正史は「当たり前だ」と吐き捨てた。「彼がさつき言つたようにお前は人として、してはならぬことをしたんだ。お前のせいで何百人という人間が死んでしまうんだぞ！俺はもうこれ以上、死人を出したくなんかないのに！」

「綺麗」とをほざくな！！

ラムルが初めて叫んだ。

「もう死人なんて見たくないだと！？人はいつかは絶対に死ぬ。それが遅いか早いかけなのだ！死人を見たくないなど、偽善者の語る絵空事でしかない」

「貴様……」

怒りをあらわにする正史を、ラムルは鼻で笑つた。

「世の中には人としての生よりも大事にしたいと思うものがあるのだよ」

「それが、哲也君に太陽の光を見せることだというのか？」

ラムルは何も言わなかつた。

「その代償があの子の命だというのか！？」

正史の怒りがさらにエスカレートする。

「そうだ」ラムルはそう言つて頷いた。

「あの子には勉学より何より、この地球の歴史を知つて欲しかったのさ。我々は、そして我々の祖先達は、こんなすばらしい世界で暮

らしていたのだといつことをね。それを知るための代償が命なら軽いものさ」

「貴様は狂つている。今の彼らにとつて、どんなに太陽の元で暮らすことが必要であったとしても、それと引き換えに命を失うなんてむごすぎだ」

「それでは、貴方はあの子達に太陽の心を教えずに人生を歩ませる」というのかね？それであの子達が完璧な人間になれると思うか？」

「この世の中に完璧な人間なんて存在しない。俺は、あの子達から太陽の光は奪わせない。そのためにも俺は研究を続ける。そして、以前のように誰もが太陽の下で暮らせる世界を作る」

「所詮は口だけの若僧か。自分の夢に飲まれて無様な死を遂げるがいい」

ラムルの挑発に、正史は何も言わずに部屋を出ていった。

「息子をよろしく頼むぞ、藤宮博士」

しかし、肝心の正史は既にこの部屋にはいなかつた。

STAGE 6

STAGE 6 → サン・ライズ ↗

訳もなく走っていた。

ただ、がむしゃらに走り続けた。

信じたくなかった。自分の父親がまさか今の今まで自分を騙し続けていたことを。

信じたくなかった。この街が所詮は夢の物語の虚構の街であることを。

哲也は気がついたら公園に来ていた。なぜ公園に来たのかはわからない。なぜかはわからないが、ここなら自分を慰めてくれる気がした。

自分がこの街に来たときからずっと街を見守ってくれていた大樹。（お前は、全てを知っていたのか？）

哲也は大樹の幹に手を当て、問うてみるが、もちろん答えなど返つてくるわけがない。

（そういえば、親父と会ったのもここだったな）

大樹に手を当てる哲也の中にあの頃の記憶が蘇つてくる。

十一年前の雨の日、僕はこの場所であの人に拾われた。僕は自分がどうして捨てられたのか覚えてはいなかった。

「こんなところで何をしているんだね？」

あの人があれが話しかけてきた。

僕の答えは「別に……」だった。今思つと、昔の自分はかなり無愛想だったのだな。

あの人には、最初に僕にそう問い合わせるだけで一向にその場を去る

うとはしなかつた。しかも腹が立つことに、大樹の周りに咲く花達を見ながら二コ二コと笑っていたのだ。

「あんた、花がそんなにおかしいかよ？」

あの人は「いいや」と小さく首を振った。花を見て笑っているのではないということは当然、笑われている対象は自然と僕になるわけだ。

「そんなんに俺がおかしいかよ？」

僕はありつけの怒りをぶちまけてやつた。

あの人は面食らつたような顔をしていたがやがて小さく首を横に振つた。

「いいや、私は君に笑顔と言つものを教えてあげようと思つただけ。どうだ、私の家に来ないか？」

今思つて、なんでだろうって思つ。僕はあの人へ反発することなく、なんというか自然にあの人を追いかけていた。この人なら信用できると、僕の直感が言つっていたのかもしれない。

「ここが君の部屋だ」

あの人は家に着くなり、僕を空き部屋に案内した。

「どういうつもりだ？」

僕は当然言い返した。いきなり家に連れてこられたと思つたら、空き部屋を指して「ここが君の部屋だ」なんて言われて不振がらない奴はいないだろう。

「どういうつもりもさつき言つたとおり、私は君に笑顔を教えるのだよ。そのためにはまず一緒に家で暮らしてどうこうともに笑うか研究せねばなるまい？」

あつけらかんと言い返され、僕はしばらく次の言葉が出なかつた。しかし、ここで反発して家を追い出されたら、僕だってたまらなかつたので、この場は黙つて言うとおりにしてやつた。

「欲しいものがあればいつでも言いなさい。すぐに揃えてあげよう。それから、この街に住む上はこの薬を飲むのを忘れてはならんぞ」「わかつている。明後日までは毎朝一粒、それ以降は四日間に一粒

でいいんだろう?」

僕がすらすらと答えると、あの人はにっこり白い歯を見せて「そのとおり」と言つて笑つた。そのときの僕にはどうして、この人が笑つてのか理解ができなかつた。

「この薬には紫外線を防ぐ膜を張るものだ。決して忘れてはなんぞ」

あの人はそう言つて僕を部屋に残して出て行つた。あのときの僕は、知らない人間に世話になるくらいなら死んだほうがマシだと思う性格だつた。なのに、僕はなぜそれをしなかつた。どうしてだろう、不思議とあの人が信頼できた。そして、僕はあの人の息子代わりとなつた。あのからいろんなものを見て、笑い、時には泣くことも教わつた。そして、一緒に生活するようになつてから一ヶ月後には、僕の感情はその時の同年代よりかは劣つっていたものの、充分感情豊かになつていた。しかし、そんな僕に一回目の不幸が訪れた。あきちゃんがかかつたあの病気に感染したのである。彼女ほど激しいものではなかつたが、楽なものではなかつた。病院にも入れられたが、見舞いに来るのはもっぱら役場の人間と少ない友達のみだつた。入院中、あの人気がきてくれたことは一度もなかつた。やつときてくれた時は、既に病氣が治りかけのときだつた。この時ほど悲しかつた時はなかつた。

僕はあの人をなじりになじつた。これでもかというくらい怒声を浴びせた。わずか六歳とは思えないほど汚い罵り言葉も使つた。しかし、あの人は何も弁解すらしようとなかつた。退院してからも半年くらいは冷戦状態が続いたが、その後はまた元通りの鞘に收まつていた。

そう、あきちゃんのかかつた病氣、あれは病氣なんかではなかつたんだ。あの薬を飲んだときに起こる副作用だつたのだ。僕の時は一ヶ月に達する前に回復したから、彼女もそろそろ完全に回復するはず。早く博士に知らせよう。

僕は大樹から離れようとして、動きを止めた。

今、このことを伝えに言ひにどうする。現に博士はあきちゃんの病気が薬の副作用であることは気づいていた。となれば、僕がいまさらのこのこと伝えに行く必要性は皆無だ。

それに、この街の秘密を知った博士はすぐあきちゃんを連れて、シェルター内の研究所に戻つてしまふだろう。

「何を言つてるんだ、これでめでたしめでたしじゃないか」

僕は嘲笑めいた笑いを浮かべた。そうだ、これでめでたしなんだ。この街は滅び、博士達は真に太陽の世界で暮らすために、より一層研究に励むだろう。これでいいんだ。いいはずなのに、なぜだろう。僕の中はとても寂しい気持ちでいっぱいだった。誰かを想いつづけることよりも誰かに忘れられることのほうがよっぽど辛い。そのことを僕は知っていたからだ。果たして、彼女の心の中に僕という存在は残つてくれるのだろうか。

力サ。ポケットに手を入れると、中から何か音がした。取り出してみると、十数個が対になつているカプセルのようなものがいくつも出てきた。

「これは博士がくれた薬?」

そういえばどうして博士は僕にこれを託したのだろう。あきちゃんに飲ませるなら、役場に行く前に直接彼女に渡せばよかつたのに。ふと、僕の頭の中に博士の言つた言葉が思い起こされた。

「そうだ、博士は僕にこれを飲むようにと言つていた。いつたい、どうこうことだ?」

「それが、貴方の未来への道しるべとなるからよ」

「誰だ!」

僕は突然、周囲から聞こえた声に声を低くして叫んだ。

「貴方もあきから聞いたんじゃないでしょうか? 私の名前」

「え?」

僕は必死にあきちゃんとの会話を思い出した。そういえば、彼女の母親の名前を聞いたことがあったような。名前は確か千春と言つていた。

「大正解」

その声は嬉しそうに言つと、その正体を僕に明かした。

一瞬、僕は目を疑つた。目の前に突然現れた人は……

「浮いている？」

そう、彼女は浮いていた。正確に言つと、下半身にあるべきはずのパンツがそこにはなかつた。

「まさか……幽霊？」

僕が驚きながら言つと、千春は嬉しそうに「ピンポーン」と明るく答えた。

「何と私は幽霊なの。でも、悪霊とかじゃないわよ。ちゃんと幽霊界の人にお願いして、ある目的のためにやってきたの」

幽霊界？なんだか話が違う次元に移ってきてるよくな……

「ふうん、貴方があきの言つていた哲也君ね。あきの言つてたとおり感じよさそうな少年じゃない」

呆然としている僕を尻目に千春はしきりに僕の体をじろじろと見ていて。

「ちょっと貴方いきなりなんですか。人の体をじろじろと見て！」「あきの決めた人はどんな人かな」とか思つてちょっと精神のほうまで見できちやつた

精神のほうまで見てきただつて？なんだか頭が痛くなつてきた。これ以上この人（？）に関わるのはよしたほうがいいかもしない。心の中の僕がそう悲鳴を上げていた。

「失礼ね。人を変質者呼ばわりしないでよね！」

なつ！？今考えていたことを読まれた？そんな馬鹿な。

彼女はそんな僕の考えをまたも察したかのように「幽霊つて便利よね。人の心中まで簡単に読めちゃうんだもの」と悪戯っぽく笑つた。

こうなつてはもう逃げようがない。僕は仕方なく千春が現世に来た理由を尋ねた。

「あきにちょっと用事があつたの。それで君にさつきしたみたいに

心中にこいつて、会話をしてきたのよ。あの子も最初は貴方と同じような顔をしていたわ」

千春はクスクスと笑った。

「ピピピピピ。突然、甲高い音が僕らの周りに響き渡った。ビッシュやら僕の携帯電話ではないみたいだけど…？」

「あ、もしもし」

僕の目の前にはまたも信じがたい光景が飛び込んできた。
(幽霊が携帯を使つてる)

と叫づか、幽霊つて透明だから物体をもてないんじゃなかつたつけ?

やばい。僕の現実感がどんどん薄れていく気がする。小声だから、何を話しているのかは僕にはわからないが、彼女の表情から察するに、あまつよいことではないようだ。

千春はため息をつきながら携帯電話をしまじこんだ。(ビーン、
とはちよつと言えなー)

「ふう、せつかく君と出合えたけど、もつお別れが来ちゃつた。残念」

千春は心底寂しそうに言つた。

「どうこいつことだよ?」

僕が言つと、千春は簡単に理由を説明してくれた。ビッシュや、幽霊が現世にどどまれる時間はあらかじめ幽霊会とやらで定めてあって、彼女はそれをすでに一分オーバーしているらしいのだ。

「一分くらいおまけしてくれたつていいじゃない!ねえ?」

う~む、問題はそこでよいのだろうか?

「じゃあ、私はもう帰るけど、一つだけ。君、早くそれを飲まないと本当に取り返しのつかないことになるわよ」
「ちよつと待つてよ!これを飲まなかつたら僕はビッシュなるんだよ!？」

「一度とあきと会えなくなるわ。それでもいいならそうしなさいな」
千春は最後に脅迫めいたことをつぶやいて、虚空へと消え去つた。

千春の消えた空を見つめながら、哲也は呆然としていた。「いや、半分は呆気に取られていた。何せ、幽靈に脅迫された人間など、人類史上初の出来事だつたからだ。そもそも一十五世紀に実際に幽靈を見たという事実のほうがすごい。」

混乱した頭を静めながら哲也はゆっくりと西へ沈みつつある太陽に目をやつた。

（僕はあの娘のために太陽を捨てることができるのだらうか……）眩い星の中央にあきの顔が写る。

「こんなところにいたのか」

不意に声をかけられ、肩が震えた。

「親父……」

「急に飛び出したと思つたら、こんなとこまでまかつと田なんぞ眺めおつて」

「少し気持ちの整理をしていただけだ。それより藤富博士はどうした？」

「彼ならとつぐにあきさんのもとへと帰つたよ」

「そつか……」

哲也は素つ氣無くつぶやいた。

「いいのか？」

ラムルがつぶやいた。

「あの娘をこのまま帰しても」

「別に……僕と彼女では生きる場所が違いすぎたんだ。一緒にいられない」

哲也の感情を押し殺した言葉をラムルは鼻で笑つた。

「お前がこんな虚構の世界で生きるのはまだ早すぎる。だからこそ、博士はお前に道しるべをくれたんじゃないか。それを無にするといふことは、博士の期待を裏切ると同じだぞ？」

哲也は何も言わず山の陰にほとんど隠れて光を放つだけの太陽に目をやつた。

「こんなまやかしの光を信じるな。博士の言つたとおり、まやかしは所詮まやかしなんだ。お前にそんな世界で生きていて欲しくはない」

「でも、親父……」

「私のことは気にするな。お前に對してのせめてもの償いで、私は太陽の元に逝くとしよう」

ラムルは膝から一気に地面に崩れ落ちた。

「嫌だ！死ぬな、親父！！」

泣き叫ぶ息子の頬を伝わる涙を手で隠すように覆いながらラムルは微笑んだ。

「そんなしょぼくれた顔をするな。人はいつか必ず死ぬ。お前もその悲しみを乗り越えなければならん」

哲也は必死に首を横に振つた。ラムルを叱つてやりたかったが、口から出るのは嗚咽だけだった。

「前へ進め。お前と、お前の決めたパートナーと共に。私の死を決して無駄なものにするんじゃないぞ」

大樹の幹を枕に、ラムルは永遠の眠りについた。

太陽が沈み、暗闇を星が照らす中、哲也は永劫とも言える時間、父親の手を握つて泣いていた。

「あき、そこに置いてあるウイスキーの小瓶をくれないか？」

あきは小さく頷き、墓石においてあるウイスキーの小瓶を手渡した。哲也は小瓶を受取ると、それを墓石の上から掛けた。

(もう十年か……親父、ちゃんと見てるかい?)

哲也はふっと空を見上げた。今日は雲ひとつない快晴で、太陽は眩にまで輝いていた。

(ここまでくるのに十年もかかったよ)

「ハハハ、かかり過ぎちゃったかな?」

「哲ちゃん、何か呼んだ?」

「いや、なんでもないよ」

哲也は後ろで待つていてるあきに優しく微笑んだ。

「お義父さん、元気にしてた?」

あきの問いに哲也は小さく頷いた。

「もう十年も経つのねえ」

あきは遠い田で空を見上げた。

「ここまでくるのは本当に長かったね。でも、哲ちゃんが、お父さんが、皆ががんばってやつと守つたんだよ」

「うん。そして、あき、いつも君が側にいてくれた」

「うん……」

あきは小さく頷いた。

「私、今すぐ幸せだよ」

「それは僕も同じだ」

二人の男女は、墓に向かつて手を合わせた。

(僕は本当に幸せ者だ。自分の決めたパートナーと一緒にいられて。人がまた、太陽の下で暮らせるようになつて。でも、やっぱり親父がないのは寂しい)

「そんなしょぼくれた顔をするんじゃない。私はお前が幸せであるなら満足だ」

「あき、彼と仲良くなれるのよ。少々のことは大目に見てあげるのが

いい女の「ツだからね」

「「！」」

あきと哲也は同時に空を見上げた。

「哲ちゃん、今ね……」

「うん、聞こえた……」

「お母さん達に励まされちゃったね」

「ああ……」

哲也は恥ずかしそうに後ろ頭を搔いた。

「いつまでも後ろばかり向いてられないよな」

哲也は物言わぬ墓石に向けてにつこりと微笑んだ。

「さあ、行こう！これからは僕たちの時代だ！」

「うん……」

今、二人の若者は未来という名の街へ向けて旅立つた。

一人の若者が気づくことはあるだろうか。彼らそのものが人々にとっては太陽だということに。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8015a/>

太陽が見える街

2010年10月8日15時49分発行